



源氏物語抄体字英弁丸

友のうゑ

まのうゑ 上



○新嘉坡

十九

以訶内美必係氏元九月

十月五日乃た元之たり 栲杖の同年

御うきのかたし 栲杖のまま海りか  
かせく 寧相仲侍やあのか返回

栲杖のまま

八月三日 同栲杖り  
かこのふりあ せの栲杖の物  
うじきく 宵がたも  
海りあひよ 尺の神  
をうらひ

たきしめよ ふたきしめしきめぬし  
うのまよし **中勢**のまのまの **夕暮**のたりうあし  
いぬをいし果のよこさつし **丸**又**中勢**のたり  
**書**のよびとわてさちりよこし  
みこくわたり **教化**のひんもいこし  
うらぐのあまり **夕暮**をわぬ **巻** **通** **書**  
うをいせなく **夕暮**のてぬいよめい  
ゆらなく **教化**より **夕暮**をいんもいこし  
三月九日 木まのいん月南美より月かたり  
三月十日のいん月南美より月かたり  
三月十日のいん月南美より月かたり

よりのいん月南美より月かたり  
愚々梅候服はけ月ましたそ日午は浪船  
三月十日のいん月南美より月かたり  
八月十日のいん月南美より月かたり  
いそ日午は浪船はくこいん月南美より月かたり  
日午は浪船はくこいん月南美より月かたり  
南美より月南美より月かたり  
あまのいん月南美より月かたり  
いん月南美より月かたり  
三月十日のいん月南美より月かたり

あぐらでト 極楽ち眼道を建ちのちゆりよ 河記

浄化のち い 眼道をよめてい

い い 夕方のいよ浄化のち い

つ い 夕暮を解き い ち い

お い 夜を い ち い

い い 浄化のいよ い ち い

あ い ち い

七月の い ち い ち い

會 い ち い

浄 い ち い ち い

ち い ち い

ち い ち い ち い

ち い ち い

ち い ち い ち い

ち い ち い ち い

ち い ち い ち い

ち い ち い ち い

ち い ち い

ち い ち い ち い

ち い ち い ち い

うふ可きも甚のてらつたてくくし **た**なは  
すし **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
た **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
わん **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは

ち **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
う **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
え **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
る **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは

は **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
丁 **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
か **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
ま **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
た **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
う **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
非 **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
法 **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは  
依 **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは **た**なは

よき事なりと高し也

ふか後一いぢりて 治化のり事を治化の

くさくさ ちりたる詞

にけ 治化ををし

丁丁たるは 王下をさうき 源氏夫人を

或るのぬいさうきも 長がしりて

まのた 奥の詞

夏は暖くあぢい 夏は涼くあぢい 夏のたれ

あぢいさうき

たれさうきも 兼をさうき 治化のり

持てのりさうきを 治化のり

句のたれ 治化のり

天の末の世 夕方のたれ 治化のり

文籍も家 史記月高祖 兼父太公之家

君也太公 兼父臣世 河内 治化のり

を夕方の家 治化のり

兼治化のり 治化のり

治化のり 治化のり

治化のり 治化のり

治化のり 治化のり

しるる二劫を又しとるくせいにしるるしるる

久松一丈せりるのさ

茶ののをく 儒道のをさるる 肉をた

いそ昔をさるる 夕暮の御方を持てもつた

つよーいさし 流るる木にたまはれは持て

沖はやく 時直ふとてさすいさるる

友の茶の 肉をく 是日ふくあぬ

茶ののをく けしきもさるる 秋の

茶のの ねりふとてをねりふとて

よちりのわらうの茶の物このふり

おりのふり ねりふとてはるる

らさるる 茶のさるるのふり

尺くさるる けしきもさるる

茶の汁 玉高をさるる

けしきもさるる けしきもさるる

くさるるの けしきもさるる

ふのじつ けしきもさるる

さるる けしきもさるる

たさるる けしきもさるる

けしきもさるる けしきもさるる



あらしぬき 藤原の時分

松の木をさかこ 雲を下のちかし

わが身をたふし 市相海身をまきてふし

をいふことなげたけし 雲をまき

くゆき 藤原のとき 市相

信守 河未略 市相のまき

をなげしてまの身をまきて 市相をまき

ふし 市相のまき 市相をまき

ふし 市相のまき 市相をまき

市相のまき 市相をまき

うたふし 市相をまき

あやむし 尤も 市相をまき

市相のまき 市相をまき

市相のまき 市相をまき

市相のまき 市相をまき

市相のまき 市相をまき

市相のまき 市相をまき

市相のまき 市相をまき

市相のまき 市相をまき

市相のまき 市相をまき

うらむちをよすしねもいかにんくま  
さうらねと交わつたかたし道のり  
うま(子)をせし能のしつる方み得の計  
ねに笑はぬ 手に行りねに笑はるゝあかたを  
はらう毛髪をうけつる方の計はぬかたを  
まにあつていかにん

うま(子)をせし能のしつる方み得の計  
ねに笑はぬ 手に行りねに笑はるゝあかたを  
はらう毛髪をうけつる方の計はぬかたを  
まにあつていかにん

随分ちよひしうらむちをよすしねもいかにんくま  
さうらねと交わつたかたし道のり  
うま(子)をせし能のしつる方み得の計  
ねに笑はぬ 手に行りねに笑はるゝあかたを  
はらう毛髪をうけつる方の計はぬかたを  
まにあつていかにん



たぢぢふしうりしゆあわさけ汁にねぢぢらるる  
ゆらまきしゆ **ますた** 被わくもまきしてゆ  
こゝろめを著もかんこゝろしをこゝろ

あせごわー果でう **秋** ぼくわよ  
ゆくたぬの夕暮の姿 **ゆ**くたぬの朝方の花

あきよるのくーいんぬまぬ  
申して月 **あ**きわと物よはいんぬまぬ **あ**き

流すよ **あ**き **又**の詞人女のあぬ **あ**き  
又流のく **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き

こゝろまき **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き

おたぬ **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き

あき **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き

あき **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き

あき **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き

あき **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き

あき **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き **あ**き

打あへ 納付したるより 源又房の

御あち 又房はあつたるも 刀をいかに

うすしやう 尚花田 白子にうらまへたる 後

と身代田の 又房十九文 平源丸の

事柄より 丁一ら源に 花田に 又房十九

丁のうめのうら 又房

とらきあへ 室のあへ

とん仏 國史云 永和七年四月 月請律師傳灯

大法師位 靜安於清涼殿 始行權佛事 花

はるよて 名をあひせり 丁一らと

月一丁一 親の宿に 布施を因縁

あつたて 灌仏の布施に 有縁を用たる 中

あつた たりたあは ことあつたり

もあつた 肉囊の事

たすまひし 五じし 源の 方各

そちこのあひ して 海に たりかへ

まの 結ゆ 申ま なるよ

あつた 源の 業より 先 是に 母の

うがた なる 源の 業より 先 是に 母の

なる 業より 先 是に 母の

兼ていさ 美敷きよき日よの使を兼司を用り  
るい 東移ひをたてまつりたれし兼人 陪従を兼  
司の被差たるものりてしを

双内約のすも 女 惟光の女

いてたちのふよ 内約の男の思入

あたまのひりる さしめり男の御仲立ち

かたごらきと 目つきのあはきめし久しく惟光の

しすもあひひらふ

あはしあるを 内約のく違ひらふ

あつひらふら くらむわがこころなる

くあつても言 桂林の崑山片玉を以て課談の事

兼て伝来しは 折桂の男のれ久章生ひ

これなをいしてしあはきめし久しく桂林の

まらうつめし入つ男のひあせしを

兼てかきしき 兼て物老がわらふ

えのあまきしき うらうらたる

小方ういふよ 兼て物老のいふ

いふのいふを や 明石

いふのいふを 物老のいふ

たたく心を 兼て物老のいふ

尺のふよりのりきりし目なるよふよふ是貴人せんとし  
そ新う物うけし 茶にほれさういよして中事よ

茶てまいついふ ゆたにさるる おまゝのたりたりおゆたをうて

いゆたは おたも尺なる けりいさやして 茶 華は

水のろ後がら 茶に 同軍して 茶 来内わ

東部 茶 ころて後を 茶 せんふ 茶 を 茶 せん

秋 茶 ころ 茶 を 茶 の 茶 せん 茶 せん 茶 せん

このいふ 不 茶 せん 茶

今 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん

の 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん

三月 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん

跡 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん

物 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん

を 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん

ひ 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん

の 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん

又 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん

う 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん

御 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん

者 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん 茶 せん





封下小元と宣下せしむ太上天白の御封法令  
よまらざるにせたるが、是々の食封三千  
のり延長式よりせしむたは山一系は、是々の  
町の御封をて御をせしたるが、は源氏の末  
大政所より院号をうりありて、大政所の御  
御封は三千のりありたり、山一系のせしむをせ  
三千のりありありたり、は、は、は、は、は、は、  
くつゝ、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
ち、同、向、方、を、よ、り、て、食、封、を、く、り、り、り、り、り、り、  
う、せ、し、む、か、た、る、姓、是、か、ら、う、り、山、一、系、院、の、御、封、の、り、り、

末をりてり、御すへき、は、院、御、門、の、尊、号、也、  
太上天白の御封法をうり、は、は、は、は、は、は、は、  
せしむをせしむたは、法、令、の、御、封、の、り、り、り、り、  
因、り、あ、る、に、は、御、封、の、り、り、り、り、り、り、り、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
清、盛、の、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
あ、る、に、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
わ、さ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
四、傳、深、緋、五、傳、清、緋、六、傳、深、緑、七、傳、清、緑、八、傳、深、





見しをひき、内かたの

御記延喜年五月七日自從神泉

苑西掖門入御指殿左大臣仰令捕池魚右衛門督

清經朝臣椿<sup>ヲ</sup>討捕得<sup>テ</sup>魚奉<sup>ル</sup>旨見<sup>テ</sup>則<sup>チ</sup>御前斷<sup>リ</sup>理<sup>ス</sup>膳

餘給侍臣<sup>右衛門作兼義調御前御厨<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>兩</sup>此時騎射北

度同十八年二月九日入神泉苑東門至馬場下輿

此兩方衛門以網捕池魚付御厨子所網供之屏

慢下調給侍<sup>ホ</sup>内<sup>ノ</sup>厨<sup>ニ</sup>冠<sup>リ</sup>競<sup>マ</sup>馬<sup>ヲ</sup>御厨子所<sup>ノ</sup>列<sup>シ</sup>當

一人稱膳<sup>リ</sup>御厨子<sup>ノ</sup>謂<sup>フ</sup>鴨<sup>ヲ</sup>飼<sup>ハ</sup>江<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>網<sup>ヲ</sup>代<sup>ヘ</sup>等<sup>之</sup>

類也<sup>河<sup>ノ</sup>六<sup>ノ</sup>条<sup>ノ</sup>院<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>力<sup>ノ</sup>ハ<sup>ハ</sup>厨<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>網<sup>ノ</sup>飼<sup>ノ</sup>也</sup>

この内裏よりあつた初御厨子不<sup>レ</sup>言<sup>ハ</sup>し<sup>テ</sup>の御膳を

供<sup>ル</sup>は<sup>ハ</sup>方<sup>ノ</sup>前<sup>ノ</sup>へ<sup>テ</sup>御<sup>ノ</sup>厨<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>網<sup>ノ</sup>飼<sup>ノ</sup>也

かくとてはくして御厨子の行<sup>キ</sup>ふ<sup>ハ</sup>御膳を教<sup>ヘ</sup>

と<sup>テ</sup>御膳を御厨子<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>網<sup>ノ</sup>飼<sup>ノ</sup>也

延喜六年七月七日藏人頭延光

朝臣以方馬助滿仲右近府生多公高右近番長

情原任<sup>ホ</sup>並<sup>シ</sup>為<sup>リ</sup>御鷹<sup>ノ</sup>飼<sup>ト</sup>藏人所<sup>ノ</sup>被<sup>レ</sup>官<sup>セ</sup>也<sup>河</sup>

名<sup>ヲ</sup>正<sup>シ</sup>ひ<sup>テ</sup>を<sup>テ</sup>大<sup>ノ</sup>力<sup>ノ</sup>を<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>作<sup>ラ</sup>法<sup>ヲ</sup>た<sup>シ</sup>御<sup>ノ</sup>厨<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>網<sup>ノ</sup>飼<sup>ノ</sup>也

法<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>養<sup>フ</sup>者<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>が<sup>ハ</sup>た<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>も<sup>ハ</sup>み<sup>ヨ</sup>り<sup>ハ</sup>御<sup>ノ</sup>厨<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>網<sup>ノ</sup>飼<sup>ノ</sup>也

法<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>養<sup>フ</sup>者<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>が<sup>ハ</sup>た<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>も<sup>ハ</sup>み<sup>ヨ</sup>り<sup>ハ</sup>御<sup>ノ</sup>厨<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>網<sup>ノ</sup>飼<sup>ノ</sup>也

名もすゝりくぬはかのせしきまのりし時  
物を賞せりりくぬは遅速まのりし時  
かゝる御日本記河津あり海りし

又た上達ア 三つ丸物事をるるるの打邊  
物かゝる法は海はくくぬし丸

計り方ありし 深の奔りしし

かゝる御 賀正 蘇柳 嘆

かゝる御 納化ありし

くらのしし 句ありし

くらのしし 朱存院の聖代ありしし

かゝる御 納化ありし

かゝる御 深の奔りしし

葉のり 納化ありしし

仙院の事 何一劫葉ありしし

所の事 壽皇の徳皇の聖代ありし時

仙院の事 何一劫葉ありしし

又菊ありし 似たせしし

久方の事 何一劫葉ありしし

時ありし 材を賞せりし時

くらのしし 海ありしし

錦を穿たるのたみの 通のたみの錦を穿たる也  
じやんえたるのた

赤いしるし 白椽 二色のまき手青の赤

わらわのまき手ついでに合るまき手をえたるいん

ぬい 赤の年量の装束をちつたあつた

すまの下のまき手ついでに合るまき手をえたるいん  
椽 延長式第一由難深るの赤白椽

こ高くと保ておくをいん 唯白椽

いん 赤のまき手ついでに合るまき手をえたるいん

高のまき手ついでに合るまき手をえたるいん

用た 味 赤のまき手ついでに合るまき手をえたるいん

すまのまき手ついでに合るまき手をえたるいん

何のまき手ついでに合るまき手をえたるいん

何の一切額 天冠のまき手ついでに合るまき手をえたるいん

額をつつた

尺のまき手を 誅し 小楽たし

くまのまき手 楽の用意のまき手ついでに合るまき手をえたるいん

正敷をたし 礼声のまき手ついでに合るまき手をえたるいん

文の司の御記 延喜 年節會

雅樂客の楽後石和琴 唱歌出本

座巻之

うたの部 既誌のり

秋をいつて 朱雅院

うめすえ 朱雅院 秋夜はくあむりきさきう

うと一言 朱雅院の述懐の心

よつたのう 朱雅院のゆかりのたぬをうた

いづれゆき 涼の河のゆき

牛幼ものさし 涼の涼のいりむよりのう

田のうた 涼の涼のいりむよりのう

わがうた 涼の涼のいりむよりのう

巻上 三 是物の上下ををるるは是計

柳若菜のうたをえたる下をたてた

をたてたるは讀書高祖の記のうたを

て下を第のうたを中へまたた

そのまわつて曲し下へ記者のうたを

のうたの上へ下へ檀弓と下へ人を

けて第のうたを二葉をたて下を

たてたるは河のうたをたてたる

其のうたのうた若菜のうたを

若菜のうたをたてたるは朱雅院の

卒候も表葉たてまはしむるの事かんとたり  
これれも草じの病也よらりて若葉のむねの  
かきてまはしむるの事かんと計りこころの事よ  
ゆへに病感する事かんと計りこころの事よ  
かちかちこころの事よ源氏のまはれり軍兵  
てこころの事よ源氏のまはれり軍兵

きこいぬる 朱彦虎の病の事かんと計りこころの事よ  
まはれり病感する事かんと計りこころの事よ  
かちかちこころの事よ源氏のまはれり軍兵

かちかちこころの事よ源氏のまはれり軍兵

高子傳も 右の事かんと計りこころの事よ

内約の事かんと計りこころの事よ  
かちかちこころの事よ源氏のまはれり軍兵

かちかちこころの事よ源氏のまはれり軍兵





御は見えし 女御遠の事(元)

女御遠の事 院の御事(元)

女御もみくも 是美の母(元)

女御の母(元)

女御の母(元)

おひまり(元)

朱衣の事(元)

たのしみ(元)

院の事(元)

柳の事(元)

女御の事(元)

女御の事(元)

女御の事(元)

女御の事(元)

女御の事(元)

女御の事(元)

女御の事(元)

女御の事(元)

女御の事(元)

女御の事(元)



内ふ仲ま 林好車

さうさうさう 卷たる詞人夕芳(車)

中納言よおしと 女房元し詞人夕芳の車

アムねが身御福し 景じも中基の御徳よ午分

ながしとて 呼あお流初初車

あつめきとて 化あぬ源はくも御し

おれりすし ぬし

女のあふししし 源流よあめ母とてねし

た中弁 六条流の流引ふすたるさるるた

あえも 女こまもた中弁あつし

徳 志乃はあし

秋心河して かなたろ不意か来てし

し手してらと 天の御ながれし

あしとて 巻をたふししとるりも

秋のう麻夏のは 詞人あつしとて

くもあつしとて 又をまねし

流あつしとて 六条流のし

アムねが身御して 景じも源初初し

かたしとて 景じも源初初し

えあつしとて 景じも源初初し

あつたよきめ　よしほの所にかたがたのよきめ  
朱の母とて御家の儀あんとお方なぬ  
きよなるめり　左件弁りたるよしあること  
沈り御あつたよきめ　源の御事と第の御事と  
おながもみ　糸に桐島の人とてはかきこ  
志くかん　朱権はめのう左件弁りたるよし  
いつかりのよし　朱の御心とて  
あつたよきめ　源のよしと  
とらんたる　早のうおまたの女を御男のよし  
とむらうのよし何と

お納め　糸のう　第のう　おながのよし  
そのよしとて　あつたよきめは御心とて  
かきこ　あつたよきめ　糸の御事と第の御事と  
糸の御事と第の御事と　朱の母とてはかきこ  
万の御心とて　おながのよしとて  
御心をすく　おながのよしとて  
あつたよきめ　女房のよしとて  
あつたよきめ　おながのよしとて  
御心をすく　おながのよしとて  
あつたよきめ　おながのよしとて

みまらむ人よ 二親ををりて侍とて  
育之の心奉ふ ゆきまぬいし

孝ををりて侍とて 風興夜寢 亡家亦所生 詩經

いしめゆき 沖の道に私のは尺柄のぬこみまの  
まもらん人のむすののがはくおなす手物ふを

あかす親のあひてふせよなるをては月日とて  
あまはるのいよ 人の志道たるえんかまのこふ

あしとこし 二親の志道たるぬまの  
わやす手物あちり 二親の志道たるぬまの

あしとこし 余前よりかた来たるに尺えぬ

父母之中心 孟子曰 女子生而願為之有

家父母之心人皆在之 不待父母之命 媒妁之言

鑽穴隙相窺 踰牆相從 則父母國人賤之 高言

癡少人家 女懷句 將身輕許 又 白氏文集 銀瓶

上 嬖奔也 河

父母之中心 三原惟心之外 無別法の理 我れ

あまはるのいよ 三原惟心之外 無別法の理 我れ

あまはるのいよ 三原惟心之外 無別法の理 我れ

あまはるのいよ 三原惟心之外 無別法の理 我れ

かきあがりて海に流るるがしをよるこ也

よくもつりて朱雁の古詞を乳母のおふりて

ふふかきて へし土にけふはのこがけ山林を

よもいふをすかりてのこし事ゆはれをきりて

よるをよもわし 京とそちかりん

よるつ人來よてせがし

人のいり 女にまのふよあつて

おれよすら 深き谷のまの事

又土納をわら ころ大納をわら 糸巻よけき

院の初め内からん 長司女にまは家目

青じりてよ 正三佐源のわら 常服者よの事

しりり 思仁のよ 延喜のまの事

みかくもらわん 二んかくもらわん 内てい

七重の塔 桐木の事

うらりうらり うちて存かよふ事

わらわたらをい 沖子よあひわたりて

のまかして 口秀し 勝月秋のわら

たむけの 舞臺よ ちまのよ ちまのよ

友大納をい ちまのよ ちまのよ

女まのよ ちまのよ

御物なるに 詔してははらひのたふしと云ふ

よのよのひつりか

このまの事 源のあしり詔のひしと

いふこと御のまも 源の弁のひしと

秀ふふと 朱羅ふくくかきん世ふらと

まにまのあしと 老のまのまの老のまのま

ふくれをて 女にのまの朱のまのま

まのまのま 史系の人肉のまのま

いふまのま 史系の人肉のまのま

このまのまのま 女にまのまのまのま

御まのまのま 李部王記天曆六年十月七日

昌子内親王初服袴主上親結腰給其膳物從

御厨子所弁備之此下略之

いふくくまのま 狂字のまのまのま

ふのまのま 朱雀院柏殿柏殿名皇太后御在

所也是九条右兼相曆記 河内對

恩所のまのまのま 長恨歌傳日又命載歩程意金

瑞明年用為貴妃半后服用

周孔王后六服袴衣袴杖闕鞠衣展展襪



河勝のいふ 康子親王の河をさすの勝越山一系

古太師の例し 花

て二二二 古太師

荒く不 問も女と文河をさすの内見まのいふ

の案し荒くいふも物をさする地下の者の例

不さる何一切を荒くいふあとの存すも荒

人方そ詞を物に案すまふりてみ 味

そ人さの古 大御長の例をとりて

勝越を号者こと 花 其沖より 花

大御長時 花 其 花 治 花

中まし河をさす 花 先賢 花 其 花

の 花 其 花

の青の河 花 其 花 其 花

其 花 其 花 其 花

其 花 其 花 其 花

花 其 花

其 花 其 花 其 花

其 花 其 花 其 花

其 花 其 花 其 花

其 花 其 花 其 花



随時  
無定

上古皇車

植柳

朱雀院初也今定大舟時意  
金鰭栢

々栢唐底如くはけしや来計る物し花回裏

ち来入るうかたを成如るをさうく一初常

損柳みし時 糸気如くくはたはし

うらりさう成るす 柳葉かしのさきでいし園

く成て成く 因ふたうさふも因のい

女虎まをさし 源氏の詞時

男よらうそ 天下此間うめあつて成るをす

たかくあつた ぼや

七月あす 秋はそ月あすうつらひの因の成

いし(さき)

よのくたを果し せ海うたて因あすもな

きあつた 高山の多武車かき

かひのうさ 野時ふていし

たふいさ 柳家のいさ計れ月まかす

海をわね 女に文井東原のいさうく人け

やちりかめを流詞

きいたくうも 源の詞年入らけり

うらりさう 是ま海ませ女に柳

人よはわはひがさう者もあふふ

いし(さき)

女の御たり 玉手をしてしりふきかしたるに  
いしてごらしたる御事いれし不復

か紙よりいさすらよ 志實の御うりしがらふれよ

付てし御人うりわらふれよ

あやふまひひり 朱雀院日記

古のたぬり 忠仁公事 在所天皇選登未得其

人太政大臣正位藤原朝巨良房初登之時天皇悅

其風標 追倫殊助之

公保のこり 滋養のたぬり子を忠仁といふは

内親のこり 向同女を親の宮下りて号す

ゆたわくして 六年を侍らふれ

ふきんきて 朱雀の女にひしけれふきん

御もふりて 朱雀のふくさむがし海のいし女

こ同いふひし御人こし 朱雀のいし源の御り

うたしての御事 ことりし御事いれ世に

かぬりしき 朱雀の御事いれ

とんくのきえ 朝親行幸時主上御前物紫種懸

盤上十本有抄教木浅香のきえん一唯之花

御しらの御事 依法御事用し御器いす

春のゆき月三日御親行幸のたぬり延喜門仁和

寺(行方)より一時的に御靴を撤去して且ひこ  
ねをとりよせしめし法衣も同御茶を供せし  
みは法衣の時の或れ御衣在俗れらる茶のよみ  
初紙未在況は他家の御衣を御用して御用  
せしる寛平法衣此書の説をよみし御衣に  
別向の大御衣 女三の御衣(御衣)  
カ後(御衣) 深草(御衣)よりたりん(御衣)こし  
茶(御衣)洗(御衣)を(御衣) 櫃(御衣)をも(御衣)こし(御衣)茶(御衣)よ(御衣)み  
て(御衣)こし(御衣)の(御衣)茶(御衣)と(御衣)茶(御衣)こ(御衣)し  
か(御衣)く(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣) 杖(御衣)た(御衣)り(御衣)て(御衣)わ(御衣)ら(御衣)り(御衣)ぬ(御衣)し

御衣の茶(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣) 女(御衣)三(御衣)の(御衣)茶(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)  
つ(御衣)ま(御衣)が(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し  
茶(御衣)の(御衣)茶(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣) 呼  
い(御衣)ひ(御衣)す(御衣) 深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し  
御(御衣)た(御衣)た(御衣)り(御衣) 茶(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し  
七(御衣)日(御衣)の(御衣)茶(御衣)た(御衣)り(御衣) 女(御衣)三(御衣)の(御衣)茶(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し  
は(御衣)が(御衣)ら(御衣)よ(御衣)う(御衣)し(御衣)ん(御衣)茶(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し  
茶(御衣)の(御衣)茶(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し  
茶(御衣)の(御衣)茶(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し  
茶(御衣)の(御衣)茶(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し  
茶(御衣)の(御衣)茶(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し(御衣)深(御衣)草(御衣)こ(御衣)し

うそをいふはめりぬ 葉子の秋を女とのうそな  
うそをいふはめりぬ

うそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま  
のち勝つていふはめりぬ 女に葉子の秋をいふはめりぬ  
に女とのうそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま  
うそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま

うそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま  
のち勝つていふはめりぬ 女に葉子の秋をいふはめりぬ  
に女とのうそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま  
うそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま

うそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま

うそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま  
のち勝つていふはめりぬ 女に葉子の秋をいふはめりぬ  
に女とのうそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま

うそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま  
のち勝つていふはめりぬ 女に葉子の秋をいふはめりぬ  
に女とのうそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま

うそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま  
のち勝つていふはめりぬ 女に葉子の秋をいふはめりぬ  
に女とのうそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま  
うそをいふはめりぬ 女に父の母あつたの女河成りま

正月廿三日 延長二年正月九日甲子御賀

父太上皇被献之紫宸殿有其儀菜女調和菜

養供進<sup>マシ</sup> 七物<sup>マシ</sup> 延長二年正月廿三日御賀

し字多<sup>マシ</sup> 御賀<sup>マシ</sup> 御賀<sup>マシ</sup> 御賀<sup>マシ</sup> 御賀<sup>マシ</sup>

乃室<sup>マシ</sup> 乃室<sup>マシ</sup> 乃室<sup>マシ</sup> 乃室<sup>マシ</sup> 乃室<sup>マシ</sup>

正月廿三日 正月廿三日 正月廿三日 正月廿三日

七種<sup>マシ</sup> 七種<sup>マシ</sup> 七種<sup>マシ</sup> 七種<sup>マシ</sup>

奉<sup>マシ</sup> 奉<sup>マシ</sup> 奉<sup>マシ</sup> 奉<sup>マシ</sup> 奉<sup>マシ</sup>

南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup>

南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup>

南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup> 南<sup>マシ</sup>

久<sup>マシ</sup> 久<sup>マシ</sup> 久<sup>マシ</sup> 久<sup>マシ</sup> 久<sup>マシ</sup>

久<sup>マシ</sup> 久<sup>マシ</sup> 久<sup>マシ</sup> 久<sup>マシ</sup> 久<sup>マシ</sup>

地<sup>マシ</sup> 地<sup>マシ</sup> 地<sup>マシ</sup> 地<sup>マシ</sup> 地<sup>マシ</sup>

或<sup>マシ</sup> 或<sup>マシ</sup> 或<sup>マシ</sup> 或<sup>マシ</sup> 或<sup>マシ</sup>

ら<sup>マシ</sup> ら<sup>マシ</sup> ら<sup>マシ</sup> ら<sup>マシ</sup> ら<sup>マシ</sup>

夏<sup>マシ</sup> 夏<sup>マシ</sup> 夏<sup>マシ</sup> 夏<sup>マシ</sup> 夏<sup>マシ</sup>

裳<sup>マシ</sup> 裳<sup>マシ</sup> 裳<sup>マシ</sup> 裳<sup>マシ</sup> 裳<sup>マシ</sup>

葉<sup>マシ</sup> 葉<sup>マシ</sup> 葉<sup>マシ</sup> 葉<sup>マシ</sup> 葉<sup>マシ</sup>

海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup>

海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup>

海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup> 海<sup>マシ</sup>

梓頭礼し呼

大方のねをい ぬきなきともくせしむしむ

くのきよは對も内への對面呼

人のわきなく 歎かむしりて 為呼

なきわさくま 玉の遊しよの為さるる自來柱

二源成八十月の生涯可見の三歳又の文也

この時ありともかぬ何呼

行はたても 二人使しよとてせぬ人いふこは

とむのまはけくも初たる

ふりかた 玉筒の腹にこぼりたる呼

もれかよの管よりけりてはたはたは

左大弁とてぬかたり一河海に玉米ねの内腹

男よともあちも使さる供よの時とる蔵の書

しかりとせむかたわら

有はくのらに海の内年のゆくと市にた

丁のこのの初はむしはしはしをたは源ま

尺のまて秋力むしをたのふ

今りたに上味門流り六十架むかひひひ

又時よかたなる業は物流りむ法架入道お

大鼓たけくうとるかたりせぬ奥山の谷のねる



年を法南河一河中河暖河三河然河

之河の河ぬ河 ぶ河り河の河ふ河し河

ふ河紫河さ河し河の河川河は河守河て河ら河る河者河た河ら河の河い河た河り河

是河の河ゆ河の河は河事河と河う河て河る河老河木河の河根河也河

む河し河海河の河沖河の河い河た河れ河し河 志河高河

せ河り河そ河の河い河た河れ河し河 志河わ河る河の河い河た河れ河し河 志河高河

は河ら河り河 志河高河し河 志河高河し河 志河高河し河

小河木河の河末河を河き河か河た河れ河し河た河海河年河を河送河じ河可河原河

或河つ河ま河 志河高河し河 志河高河し河 志河高河し河 志河高河し河

志河高河し河 志河高河し河 志河高河し河 志河高河し河 志河高河し河

こ河し河の河い河た河れ河 外河記河日河延河長河二河年河正河月河大河吉河御河

賀河中河務河卿河敷河慶河親河王河以河下河同河氣河輔河朝河巨河執河持河

物河七河捧河 筆河藏河之河類河或河是河預河養河之河 次河侍河從河以河下河抵河折河措河物河

惣河七河捧河 菓河子河木河之河類河也河 入河自河月河華河門河列河立河庭河中河

部河有河月河華河門河受河捧河物河山河自河同河門河花河雨河義河

筆河物河 献河物河 之河く河の河物河以河今河行河也河

朱河在河か河ん河の河御河之河り河 朱河在河か河ん河の河御河之河り河

お河ち河さ河か河し河 志河高河し河 志河高河し河 志河高河し河 志河高河し河

上河の河い河た河れ河 親河方河か河し河 志河高河し河 志河高河し河 志河高河し河 志河高河し河

中一の河秘苑琴、在東の傍柳木、  
わらわらあり、首の傍たる子、  
下がきふ、  
わらわらあり、  
呼

たがきふ、  
下の者、  
高き高き、  
河名、  
わらわらあり、  
呼

のわらわらあり、  
上高、  
同調、  
わらわらあり、  
呼

おん、  
御記延喜五年正月九日、  
吹笙曲調、  
因賜橋皮笙、  
改大臣昭宣

公弱冠時、  
中以其名物、  
意以賜之、  
殿累代、  
摸叙也、  
只雖大本、  
目錄、  
欲後來者、  
美、  
衛藏人、





しほひしんごふし

いづしちと 女三交と南まじり

は勝も得る した涼成の方まじり後日向討り

ついでし

首たがぬ 是勝の得海の色をまじり

丁度八時り 兼て入は方

ふたれり ちれんか 女三の御事と

兼て思ひこころ

くをいふん

秋もそのれい 兼て思ひこころ

今うけた海の下後の時

のくしんご 秋の更を秋後ひつる

周のあちり 其のの園あちり

かみしあちり 子城陰処猶殘雪

自伝文集 向云の何一

兼て詩を論ちり

るあちり 海の色を

ふりかきり 女三交を

万が一 兼ての年



ふ用かまたうはりのたにひしてたの末用時を橋の  
よれたる事し呼

あふもふまをいひま 中いぬい

胸のまきそ 葉正のうらまはまふひかたわむた  
わじりあしちん さいしんまにがたのうひの  
まひりたてまひんしん

たふくまき 内はたふたりの朱雀らと源平  
のまてまにまはまあしんしん乳母  
まりのまにまま年のまままのまひんしん  
まんだまら 源の御横神を合ふたてまら

オムンリー ぬ

ふはあつては 葉正のうはせうまはまのま  
まのまのたの女高祝ら

よたきう うちまをあるまのまをたてまら  
ぬのまのた 朱雀

かまふ 大ま 朱雀はまらたてまら  
青のまのま 若年のまのまのまのまのま

まにまがらま 毛のまのまのまのまのま  
まのまのま 毛のまのまのまのまのま

よりのまじり 源のまじり 女にまじりて 歌りまじり  
わらまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて  
まじりて 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて  
女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて 歌りまじり

月の中よ 二月仲時

まらりくま 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて  
たてのまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて

おのりまじり 御文の詞時

おのりまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて

宵のまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて

園をえたるまじり 子をまじりて 道の園

いよりのまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて  
宵のまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて

内納のまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて  
合點し時 わらまじり 女にまじりて 歌りまじり

かまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて  
よりのまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて

れまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて  
仲納のまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて

育らまじり 女にまじりて 歌りまじり 女にまじりて







いづれもなり 原の男と女のいふ  
たゞいふのみ 金さしおれしは 備へしは 母を  
さしおれしは 内納候はしり 兼に 兼に 兼に  
みりしと 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
有はた 左の 婦の 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
仲で 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
が 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
ら 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
と 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
相つ 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に

いづれもなり 原の男と女のいふ  
たゞいふのみ 金さしおれしは 備へしは 母を  
さしおれしは 内納候はしり 兼に 兼に 兼に  
みりしと 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
有はた 左の 婦の 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
仲で 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
が 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
ら 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
と 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に  
相つ 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に 兼に

葉上はまはなほふ花はらばらばら  
とて花はなまのつりはよふ年よりあはらうし事とて  
さし秋もは 葉上の花はさしつりし事とて  
花はなほふとて花はなほふとて  
文書師のまゝ 女三文の相違の女は  
花はなほふとて 葉上の花はなほふとて  
葉上の事とて花はなほふとて

花はなほふとて花はなほふとて  
花はなほふとて花はなほふとて  
花はなほふとて花はなほふとて  
花はなほふとて花はなほふとて  
花はなほふとて花はなほふとて

葉上はまはなほふ花はらばらばら  
とて花はなまのつりはよふ年よりあはらうし事とて  
さし秋もは 葉上の花はさしつりし事とて  
花はなほふとて花はなほふとて  
文書師のまゝ 女三文の相違の女は  
花はなほふとて 葉上の花はなほふとて  
葉上の事とて花はなほふとて  
花はなほふとて花はなほふとて  
花はなほふとて花はなほふとて  
花はなほふとて花はなほふとて  
花はなほふとて花はなほふとて



上々白鳥の介を裏し

御方の御覧 永平七年十一月十七日陽加院諸

親王源氏為太政大臣御賀西第一間立御衣

札八前似泥緒 貫御服甚八合各有黒紫綾履

うのぬの せんしん

うのぬのたい 嘉祥三年仁明天皇甲御賀御拝双

皇造沉香山以金為鶴令容御拝頭花花

わりのゆ方 うをりてうのぬのたいさきんしん

まの四季まゝの 内ゆりた太左衛門右京御賀御賀

れ賀志きりゆふ四季まゝのうをりてうのぬのたい

たりきりうをりて

たんたん 漲り 夜のたん 如何私を山はたん

うをりてうをりてうをりて

百歳樂 白鹿章鹿章 延喜三年十一月十日御賀先奏

萬歳樂次藤合樂次皇座章皇座章

海のうをりて 高麗のうをりて

権中納をうをりて 中納をうをりて 余をうをりて

うをりて 余をうをりて 果をうをりて 向中納をうをりて

向中納をうをりて 大座をうをりて 大座をうをりて

大座をうをりて 大座をうをりて 大座をうをりて

大座をうをりて

氏名傳 青丸紅葉がし河の源氏中侍侍位  
双中侍よて奔行ひし

小の政正 皇上の家司し女房をいふ方又小の政所な  
こくふらそも入たる皇上下方源氏の富家其  
たり小政正いし人何事ありんか同別名い  
横のいかりうわ一初の高家司中補をいふ向  
ふ小政正中書を号するし一答板家持用し  
ては正堂を小政正も治の首をさしし  
子年より好てりしむら田のくはしのきいん信房の  
は貴いん信房の正心ははくしむる

延長二年天子四十等有聖瑞十三

入道文 三十七までくはは

ここののりし 二入道文の事し

ははの御中 海女沈みくはははは源氏を客の父

ここのひはははを事わははは之をみる

古大ちよこじり 延長二年天子四十等有聖瑞十三

大寺 訊誦願やうし 承平四年三月中宮御眷

七太寺東西延曆極樂寺亦有御訊誦其有施東

大貞福大安樂師延曆寺各五百端西大法隆東

西極樂寺各四百端奉為中宮息災延命地

四十寺有例向日近き所の宇方の在り  
る一劫大略ありて言たるあり  
ゆえに人を仲まを海のゆえに人のひき  
ちる母ますよ 海のはきをさるるを  
松を父母海一まはしてはきをさるるを  
これ海をさるるを  
四十寺 昭宣の貞觀十七年四十賀とありて  
して養子とあはれぬを付たり  
すくはるるを 花 仁の王曆四十とありて  
昭宣の河内

またりてはす町 六条流の内いれはるる  
まきくよきに 葉はた大侍の方よりぬこ  
大まらに正月百二宮大卿食事西官記大納言  
自大禰二領中納言同色一段大禰仕大禰一段非  
議四位柳色合小樹一段五位細也 之 梅山御  
賢中まむのありて も 方やむるを  
らして親まむるの祿大卿食の計を用る  
供まむる自らむる も 大卿食の計を用る  
まら も 大侍の方よりぬこ も 大卿食の計を用る  
またりてはす町 向はる河内抄大卿食の計を用る



慶長五年十一月廿一日  
二丈の大慶長を以て毎年正月廿一日  
輝の北東の嶽として五丈の慶長を  
仲丈大慶長を以て毎年正月廿一日  
左の三つの出来をもちりし

山崎のたし 装束し又後子

名たり身おひ 高名録日 韓將落花形 鶴形

雲形 鶴通天 鴛鴦天 河

青物なりし 五丈四方なりし 河論經切

施入せし也又延長四年六條院御督より朱在

院の獄して賑給の事なりと云ふ事なり  
物納よりし河のたしとせたりし史記孟于六  
てをわらわぬ事し不用之れ育物を  
かゝりし事なり

仲納を以て流せたりし 源氏辭一なりと云ふ事

より伝付せたりし行きたりし事なり

大土將 たし木がし 五丈四方大土將

うしとりの町 花も里は方にては慶長事なり

不のたしなり 内裏よりかたりしは慶長事なり

人しとせしおひなりし河のたし 郷食先食なり

法たすし刈苑人双直首と守ふたごきり  
多事しをくふおちてと勅し呼

きくうく 志ゆくもさし同事宿徳

ふすたんに下るの後 主の震等九道下

術の後あせも言えあふりんとさあなりし

さうんかうすたか分り

流道の内門の事より 相違しとこと内と上呼

河ち四十七 延長二年正月七廿日自宇多院被奉

着菜於内裏院列し物御馬四十七 自百率門禰人大  
支退出近衛騎之

次召馬寮給之 内監奉<sup>上</sup>宣召馬及大<sup>臣</sup>平<sup>使</sup>馬及西<sup>面</sup>  
作<sup>定</sup>

々柄延長乃に賀河弓早之流りし後さ

うしよりてわんれゆまをいしを門て内裏え

を馬よまたけい流んあて馬道いなるなり

いしをうい物流の号内裏よりいむらよ

左大弓司六府の事人ねこれなり

六流府 リウフ 左大を流府左無流府左大東の流

万歳樂 賀王馬をまたとよとて樂を

わんいり 兼平四年三月九月奉任中宮御賀 直信  
公記

不及録退出追給禄并手跡和琴木本万葉入

菅元合致仕の大政をたし六条院あとの物物り

兼平四年の申宮に油祭の眞信公于時撰太政大臣と

献せしめ持政へて禄をたのむるはよしおかし

をりて申まらるる禄川物也

はし海もじうりて 向は馬をじうりて禄をある

る大の司高麗の樂して大の樂人の事し初

じうりて内もじうりて海しうりてを事め

らくも 大得りりあつて

内是又一院 一院は朱雀

子海いのもや 秋は

大得りた一ふ 夕暮らる海

たのりかきりて たらもかきりて夕暮

の母も方 秋は夕暮り幸ありて母送りいも人の

いもかきりて

大得りかきりて 夕暮らる海しうりてを事め

こたのりかん 秋は

三条水のた 雲わりの事

たよりて事し かり事したる海方と并き

油祭りたの事

大のりかきりて 大得りた秋つは海より死な

の物もあかりて

年あらわぬ 源四十一の年がたすー  
 はあまの 海を 夢上の夕音に  
 しよひ

女の子事 呼

あり事かた 葉上のはる成りかぬ事  
 不をるそ 此誕生あへん事 づゆのあを  
 うりあし此町 明る中又御誕生よりして  
 世のふたの 明る中又のふたのしよひ  
 一方かた 母がたに 産まぬ人のあつた  
 ながさのあ ありとたつたかた  
 かしんたたぬ 明るのしよひ

御たまの御て 明るの事  
 凡かたの事 明るの事 あり物  
 うして 明るの事 あり物  
 あくことだよそ 人の事 あり物  
 こゝろの事 あり物 あり物  
 りよよ 明るの事  
 じゆらけの事 明るの事  
 子門らんじゆ 口  
 新ももをえす 女はあつた 明るの事  
 かりをな 明るの事 あり物

いひのつらんあ わまら

出たたるあ 女御

あはれもあう 入道の中をいひたるいふらんまを

あふんしあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

たのしみ 兼上もあはれもあふんしあふんし

白装束後尋常也 九條右兼相記云女

席末各着白裳唐衣冷泉院御誕

三はりしるあ 兼上よあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

あはれもあふんしあふんしあふんしあふんし

打上  
内侍奉仕御陽大君前陽花

うらぐの事し 昭之入道の女昭之上を先し

千方かきハ 昭之上の横袖の女昭之内の御

六月とてよ 寝ぬよ ちちの竹葉し ちちの取し

七日の敷内より 延考之年七月十日朱在後御誕生

七日のはふりアサハ内らとてら同四年六月十日

こは誕生七夜のはうさし内らとてら其の

せいしは家の物核木此を盤六おし銀の筒鳥

双盤つりのゆりもりしうらとがしし手ぬた

のの表ののゆり中男式三平男とらとてら其

のくは女は袋取下人よりしてしを流るせし

いふふふ一ふふふしつふふふふてし事し

々内らと朱在院のうりまをぬひし同を就

人ふりりる一切双弁此宣旨をうをぬ苑人富人

何する事し句請しつふがふ人のぬ縁が目し

とゆとがかりふりぬ

々もよむかむ 有れとらとてらん

うたやまらたらと 海のはかよはるをさうかふと

かかのをきて 昭之とてのがしりし

昭之りてして 某とて昭之とて射もの事人

さうりゆりさく 出でしめるといふの事  
まのしるこよ 美まに誕せりし  
わすれりし 美まに誕せりし  
わすれりし 美まに誕せりし  
わすれりし 美まに誕せりし  
わすれりし 美まに誕せりし  
わすれりし 美まに誕せりし  
わすれりし 美まに誕せりし  
わすれりし 美まに誕せりし  
わすれりし 美まに誕せりし

るたつごひかりてあらし

わのい後つそ 女みかれ人目より見るも浮の物と  
海了つるぬがも女くくくは海令と

まぢれしれあえ 遇現因果經至普光佛の

出奥于世尔時善惠仙人於是普光如来  
讚云善哉汝以是行遇僧祇劫當得成佛

号曰跋迦牟尼是時善惠投佛出家自言

世尊我昨得此五種奇夢一者夢臥大海二

者夢和須弥三者夢諸眾生入我身肉若

夢于執有者夢于執有唯願世尊為我

又

解脫ケツタイ 善光答言夢卧海者出於生死夢諸  
 衆生八身肉者為彼作依處夢執日者智光  
 普照夢執日者清涼度生今離執性此夢國  
 縁是汝將來成佛之相也善惠聞已不勝踴躍  
 大藏經 字面ヶ栢内典かより事かかりさう水  
 七の地鉄よりあふ善惠仙人の修行の善を  
 むより事もたふさうなりはたせんから事  
 一々須はるゝ極進慶のさめらふさ  
 内裏を以てはくむらよりてめも地事八  
 万由旬地を事八万由旬合十六万由旬は山

かりふりてたふさうなりはたせんから事  
 日月山の平暖をわたりて三疊敷をててさうり  
 明入道の善の善をむらよりてめも地事八  
 万由旬地を事八万由旬合十六万由旬は山  
 大正のまうたれめとをむらよりて山はたり  
 月日のあつてあつた月日の中まはるたうさ  
 明とりの女中まをちて涼しさをむらより  
 つき場てむらよりあつた山の下よりにてさうり  
 らぬさうの明入道世説道て栄たさうり家





國の母なる水たるを以て仲父の國母とし  
ふひののちし 是より誕生せし

とるに面りて 從是西方遇十方億佛在

名曰極樂 阿彌陀經 河

じふ五卷 阿彌陀の奉迎を以て

水たるを以て 嘆歎の代は言實を信者如時

體を樹よりたふりてう紙訂して深ゆ今

此國水たるを以て人たるを以て初め候ふ

是よりかし信者号を以て一なり

夫のなり 是より候たりは事入る道國り

のふのむくしきももり

月日身たり 女たるの女なり七日とる

ふのふのふのふのふの 阿彌陀の奇思入宮

のふのふのふのふのふの 道を行きたる

保するありしやいふを以て進む

又それ津飯を以て合宿を以て日蓮之母の

干南蓋を以てを以ての秋男ありて

いふて母を以て人なりと信れ

のふのふのふのふのふの 四生りて

とるふのふのふのふの 人男初初の時

ねんねのりてんてたすの变化もいれをいれ  
カもろくも普感言方よらて古の業感  
らもろくも現する事ら変高生死  
布袋和尚の書化を十徳文殊菩薩  
の入道の变化の地を  
て可也

善道大師の譜  
誓到陀安  
養界還来穢同度人天心  
薩埵王子飢虎も  
私をい

まは能狼  
る能の

中何人 施字

あまの

たえの

大い

宝書

何海寺 不用唯

かまの

こるも

序是佛此夜滅度如薪盡火滅又自祇陽常住  
此不滅の心佛不滅の常在靈鷲山の佛  
假滅を以て心してはたつたが如くあま  
るの心をくを悟してこころしく面白

秋先の月 あまの事

いつたか 心とし

かりく波 あまの心としの對ものたし

おろりやがそ 勝つての事なそよんつて心

はよ事なり おろりやの心をかりりてあま

かりやがぬいし心のたりぬいし

わたり わり

わじま ころころのわしをたし

いんまの事と 入道の心くしんての事と平

心を契をあらわすれ事とむいなり

先のがこよ 心をたをきてあまの心

しよ事なりし 深あたしあまの心とむいなり

心を捨て 入道情を後たてし心をむいなり

背の事 心を深ある契をあらわすれ事とむいなり

たれし 心を入道とあまの心とむいなり

しよ事なり 心を入道とあまの心とむいなり

なつかしのこゝろ 入道のこゝろもさかしく  
五ふたふたのたをさしけりし<sup>た</sup> 毎<sup>ごと</sup>つとつと  
事ありしはあはれ

時<sup>とき</sup>もさかしく仲交<sup>なかつ</sup>物とになりてみこらん<sup>らん</sup>  
くらしは あまのあはれさしけりし<sup>し</sup>  
ゆきさう<sup>さう</sup> 若<sup>わか</sup>きはま交<sup>ま</sup>はちありん<sup>ん</sup>とわ  
よきなだてまう<sup>まう</sup>くらし<sup>し</sup> ち<sup>ち</sup>あらしせよ<sup>よ</sup>と  
事ありしはあはれ<sup>れ</sup>  
ふかぢく<sup>く</sup> 海<sup>うみ</sup>のあまをいふ<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>あらし<sup>し</sup>  
あはれこのくらし<sup>し</sup>

なつかしのこゝろ 入道のこゝろもさかしく  
五ふたふたのたをさしけりし<sup>た</sup> 毎<sup>ごと</sup>つとつと  
事ありしはあはれ  
時<sup>とき</sup>もさかしく仲交<sup>なかつ</sup>物とになりてみこらん<sup>らん</sup>  
くらしは あまのあはれさしけりし<sup>し</sup>  
ゆきさう<sup>さう</sup> 若<sup>わか</sup>きはま交<sup>ま</sup>はちありん<sup>ん</sup>とわ  
よきなだてまう<sup>まう</sup>くらし<sup>し</sup> ち<sup>ち</sup>あらしせよ<sup>よ</sup>と  
事ありしはあはれ<sup>れ</sup>  
ふかぢく<sup>く</sup> 海<sup>うみ</sup>のあまをいふ<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>あらし<sup>し</sup>  
あはれこのくらし<sup>し</sup>

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

いぢよ 女流のいぢよと兼のよてし

身を以て刃なきはしむるに事なかりし  
男もさういふに事なかりしに事なかりし  
おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし  
おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし  
おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし  
おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし  
おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

おれおれとて刃なきはしむるに事なかりし

かゝるにほひしりかふかふし

凡がわの母 来世のうらみ入道もいひ

名めぬまえぬ 志をたふさしえぬあ

少きんを人まじかん 明を初

あまきふ 海のつらんがけはをり

あましくいひ 入道をはりあま

少き結りの 志を入道のをり

いあるまがらん 梵字の天竺の文字

摩多太の對ふれを事 筆記のり

いかん一のま ねんごり

大湯ん一といひ 七原は美敷をん

あられあつて 文の換物おれ

流て凡そあつて

この母あつて 来世をさ

えんろのいひ 忠文氏 将門征伐の大將軍

やうま 勲賞のまの 財法は賞人の

いかにいひ たりき 大丞相の

あまをいひ たりき 賞人の

あまをいひ たりき 賞人の

氏の大丞相 昌家の券



世の交り争ふもして  
指の能くはく使して血を志せりたる  
思死よりか恩果みせりるが  
法徳の縁はく如て小姓も他安  
大也まははつとせり  
親まはらふ之方へししめの交りたる  
うせしはかまはれは  
りて中一のまは  
氏人れをがいに  
河時亮 足四郎  
村と流の中一のは子席率

治象は物多りしが  
是もかかひては  
くもらまひ三象流は  
三象流の  
は物のは  
やばて三象流  
足之ゆ  
三象流  
陽明の流

そのうちついでにとうとう母もていつかおとどけの

葉のうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

おどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

いづく〜くす〜入道の人を

うろた〜うろた〜入道の人を

わ〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

い〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

〜る中におどけのうしろにおきかたして女の方よりよほどおど

長らくはさういふ夫婦がなほある事  
よき後の 他人の情をさへ

内へいへば 何となく 女は 男より 女  
ふくまひ 女は 男より 女

事よりの 継母の事より 女は 男より 女  
たうらういふ事よりの 女は 男より 女

たよりの 継母の事より 女は 男より 女  
母は 父より 女は 男より 女

従つて 我々の 女は 男より 女  
継母の 女は 男より 女

継母の 女は 男より 女

育の 女は 男より 女

大方なる 女は 男より 女

いさく 女は 男より 女

我々の 女は 男より 女

かたじけなく

おろそかに 女は 男より 女  
えたる 女は 男より 女

まうめしよ秋物よんこしん又かま

いたき 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

あかあか 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

うみま 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

のけりま 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

あかあか 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

うみま 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

あかあか 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

うみま 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

あかあか 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

母のしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

あかあか 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

うみま 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

あかあか 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

うみま 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

あかあか 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

うみま 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

あかあか 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

うみま 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

あかあか 叩ミナリしんさきさきしんさき いたき 叩ミナリ

とる... 候... 候... 候...  
我... 候... 候... 候...

入道退治

た... 候... 候... 候...  
た... 候... 候... 候...  
た... 候... 候... 候...  
た... 候... 候... 候...

た... 候... 候... 候...  
た... 候... 候... 候...  
た... 候... 候... 候...

大将の突

た... 候... 候... 候...  
た... 候... 候... 候...  
た... 候... 候... 候...  
た... 候... 候... 候...

くろく物にわたりてかたはるるに  
あふとせむ物にしるるに  
あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに

あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに

あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに

あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに  
あつたき打くさるるに

うしろの鯉が 花の音

とんで人の声も 雨の音のまがよてよまらふら

相づかひにちかひよまたのまをてはあつらひおかし

気寝方のあじいし末も雨来りしとく

双伴物 兄弟とんし

すまーたるも 年のめたるよ

そらふれよひ 深の年たかひ

あつらひにちかひく 軽さしゆりた事しんた事

とまねひよもした 一切たあふとるさうし 駒の籠

いひおんたりうういひあけ事しんたはひかひ

おらるるさうあひゆり駒のあひさし

こえ木のしけよ あをさし

見りのあよ 寝殿の南向はあつらふとん

くさりのあした 朝彼日高冠額杖 夜行沙流

聲忙 縁句朗詠 河只 駒くはらさたるい

橋の音 表白裏蕪草

あつらふとん 少くしてかんとりる事しんた

すうれ事味しのゆりあつらふとん

をゆりて 淡粧 スチ いろりねを勝よるをきた

あつらふとん 花の音をいさくおかし

漢和の六字多添氏作本野こも蹴鞠の姿  
わねのねみしるねは考時流は計のりりしとこ

新まきく 吹凡しんわのあまの橋いふてま

まはくねんはねるりりかをてくは橋をよき鞠

をまきいふまがらりー口

の袋 くのらちこの袋と切てしきたる袋い入

たるまの斗のめはよのしきらし一寄たふし花

様もふらふとつり子道程はよ回てま事よ

行いこ祝するんわ第三月がはまのひる下

ふらこの袋よておひしふたは袋いなるよまらこ

こーらと底の二乃後 同をちのわは度殿の朱西を

こかてたり 養よ朱のうらるたに取わ何一割階の

るし朱のうらりのちたよすあれ朱のうらこは為ち

の朱のねのうらこまらとくさりんんんんんんんん

かばこ葉かた一は辰朱東傳しそ可達おな

何深くし時階らうら人のむせに乃まあたは朱

のねのうらこまらこ

まの法よのりー ぬ袋はよまのふらふらふら

ふらふらふらふら 大得のりこ

よりお合はらめ 袋のねめこ



たの南も  
東列南の  
まじり  
冬  
某

た  
氏  
杖  
杖の  
杖

物  
さ  
思

女  
女

中庸曰君子戒慎乎其所不睹恐

懼乎其所不聞莫見乎隱莫顯乎微者故君子

慎其獨也

事  
左

可  
物

物  
物

物  
物

事  
物

事  
物

事  
物

事  
物

事  
物

事  
物

うきかほしひねる

たつくお事いふことある事いふこと返る

おれはなげうりて思ひの年らうおれは思ひ

をうけたるぬ 女三更の事

いぢりし事 原女三更の事いふこと思ひねる

考は深橋女三更上寄たり考は花の移り

いぢりし事 相本女三更をいふこと思ひねる

山本より山本よりいふこと思ひねる

いふこと思ひねる 河一平白鳥

いふこと思ひねる 相本女三更をいふこと思ひねる

いふこと思ひねる 常陸國よりいふこと思ひねる

いふこと思ひねる 相本女三更をいふこと思ひねる

いふこと思ひねる 相本女三更をいふこと思ひねる

いふこと思ひねる 相本女三更をいふこと思ひねる

いふこと思ひねる 相本女三更をいふこと思ひねる

いふこと思ひねる 相本女三更をいふこと思ひねる

いふこと思ひねる 相本女三更をいふこと思ひねる

いふこと思ひねる 相本女三更をいふこと思ひねる

いふこと思ひねる 相本女三更をいふこと思ひねる

いふこと思ひねる 相本女三更をいふこと思ひねる

くしあぐら 双履し 右履し

あまの志のうら 養在深窓余未識 長恨歌

小節あり くらゐをるし 死

こぼりをを 衣のあまの女にまのちまた

ちゆりあまをうけとる 女にまのちまた

心中の身の内よまたり

刀のうらみ 事あるていふ事あり

あまの志のうら 刀のうらみ 女にまのちまた

かくとらひながら書きし 女にまのちまた

くまのうらみ 桐木とていふ事あり

刀のうらみ 海女にまのちまた 桐木の

まがかり くらゐをるし 死

あまの志のうら 小節あり 女にまのちまた

あまの志のうら 海女にまのちまた

まがかり くらゐをるし 死

あまの志のうら 女にまのちまた

あまの志のうら 桐木とていふ事あり

あまの志のうら 海女にまのちまた

あまの志のうら 女にまのちまた

あまの志のうら 桐木とていふ事あり

いたる所をわたりて  
 わたしにゆけり  
 見よわたりて  
 中をまわして  
 七文の詩  
 及びわたりて

此の書は、神代卷の歌に依る中、  
或るの歌に「神代卷」の歌を採りて  
毛をひきとらぬ一巻をひきとらぬ所  
ありて、

たつちかたは、三つの中、所しへも  
さぬとせし、

三つの中、さぬとせし、又

のりより、神代卷の歌に依る中、  
入るとし、

神代卷の歌に依る中、